

作品 2 4 色を編む No.2 「内と外」

根岸 和弘



このテーマは、額に納められ壁に掛けられている作品から床面の「かざ車」へと変容していく過程を表す。

額縁内の作品は、帯状の多彩な色と水玉模様を造形要素とし、編み込む技法で幾何学的なイメージを構成する作品であり、これを起点とした。

その下にかけてられている作品は、カラフルな帯と水玉に分解され、フレームから脱出し、イメージから開放される流れを表している。

これらの造形要素は透明な「かざ車」と出会い、日常の空間に展開して行く。

(1) 色を編む～額装作品「内」

5色の帯の支持体が即、表現となる。編み込む技法で構築した平面、さらに水玉模様を配することで幾何学的なイメージを強調する作品とした。

(2) イメージの開放～「外へ」

編み込まれた平面は構造上ほぐれやすく、帯状の色と水玉に分解され、その過程を落

下する姿として表現した。

(3) 展開～「外」

日常の空間に降り立った造形要素は、用意された透明な「かざ車」に出合い風を受け（室内なので人工的に起こした）、更にカラフルな水玉模様の多様な動きと混色により、リズムカルな空間を作る。

床面に配置された「かざ車」約50本の花束は、今まで野外でのインスタレーションで使用してきたものであり（浦和・大阪・山口・新潟など）、この会場から外へ繋がることの象徴とした。

(4) オープンスタジオ

展示会場に新たに設けられたオープンスタジオはライブインスタレーションやワークショップを身近なものとし、来館者とアートを共有する環境を創出した。

私はミニ「かざ車」のワークショップで参加しましたが、完成作品を手にする参加者の笑顔からそれが実感できた。

